

スープの会では新宿ターミナル周辺のホームレスと呼ばれる方々を欠かさず毎週訪問し、わずかな食料や「電話相談」の案内ピラをくばりながら、一人の人としての尊厳をこめて「こんばんは」と声をかけ、かかわりを持ってきた。この10年の活動は「フリーダイヤル相談」や、おもかげ舎など3つの宿泊所やグループホームなど「地域支援ホーム」をうみだした。最近、アパート生活への移行をサポートし地域の人々との出会いを育むフリースペース「風まち喫茶」の運営を始めている。

## 「路上」から「地域」の生活者へ 「ホームレス問題」から見えるまちづくりの可能性



後藤浩二 スープの会・世話人

連絡先：スープの会 tel/fax 03-3260-1877

E-mail : soup@pop06.odn.ne.jp

URL : <http://www1.odn.ne.jp/soup1994/>

### 「ホームレス」という言葉が示すもの

路上訪問は、一カ所に大量の食料を用意して路上生活者の方々を集めるような「炊き出し」とは違い、ごく僅かな食料を片手に、段ボールの小屋を一軒一軒訪ね歩き、声を掛けることから始めた。路上に暮らす方々個々人との関わりが深くなる過程で、95年ごろからは病院や福祉事務所への付き添い、アパート探し等、「路上の先」に繋がるような直接的な援助活動にも関わるようになる。しかしその過程で、様々な生活困難を抱えた「ホームレス」と呼ばれる方々の暮らしが垣間みえた。

例えば、家族関係のトラブルの末、新宿駅西口の路上に逃げてきていた80歳になる女性は、生活保護を受けた途端、大久保(新宿区)のど真ん中に見知らぬ土地で、4畳半のアパートを借りて一人暮らしをしなければならなかったことになった。アパート入居後に私たちが訪問するまでの一ヶ月間、道が分からないからと銭湯にも行かず、外出を最小限に控えるため、夏の盛りに冷蔵庫もない部屋の押入に食材が蓄えられていた。また同じく新宿駅西口で生活していた40歳の男性は、パーキンソン病の疑いにより生活保護を受け、北新宿でアパート暮らしを始めた。しかし、ホームヘルプサービス等の制度にうまく繋がらず、パーキンソン症状により夕飯の買い物に行くのに往復3時間かかるという生活と一人で格闘していた。また、ある50代の男性は、近隣との関係が上手く結べなかったことで外泊が重なるようになり、生活保護費をもちいて以前の路上生活の仲間と共に酒に溺れるようになる。アパート暮らしを始めて1年で路上へ舞い戻ってしまった。

路上にいるときは「ホームレス」として一括りにされるが、一人一人が個別に異なる生活ニーズをもっている。

「ホームレス」という言葉は、屋根のあるなしという単なる生活様式の違いを示すものではない。見知らぬ土地での高齢化にともなう不安や、様々な慢性疾患、アルコール依存症などの見た目には分かりにくい「心の病」を抱えたままでの孤立・・・「路上生活」に至るような具体的な生活困難を抱えつつも、それを支えられる社会関係を喪失してしまっている状態、そうした言葉として私たちは考えるようになった。

### 「居場所づくり」

地域社会の中で、個別の生活ニーズに応じた社会関係を育ててゆける、「屋根」や食料を用意するだけではこと足りない、「人との出会い」を紡いでゆく取り組み。そのための「居場所」をつくっていけないか。路上ではなく、地域社会のなかに。その一環として、冒頭のグループホームやフリースペースの取り組みへとつながってきた。

これからの「まち」のありようとして、どのような可能性があるのか。もちろん何か一つの答えを出せるようなものでもないが、参考として、新宿の大久保・戸塚周辺地域でおこなった「まち歩き」企画(2002年度・「めっせ tokyo」分科会/主催:東京ボランティア・市民活動センター)で作った「まち歩きマップ」を紹介したい。再開発などで街並みが次々とつくり変えられる一方、老朽化した住宅地が所々に取り残される。「住民」の移り変わりは激しく、「地域」としての新宿の姿は様々に変容しつつある。「外国人」と呼ばれマイノリティーとして暮らす外国籍住民の方々や、「ホームレス」と呼ばれる方々、独居高齢者・老老介護世帯等々、コミュニティーとしての繋がりを失い孤立化する方々の存在は、実は地域全体の課題としてみえてくる。個別にバラバラのテーマとして取り上げられることが多いが、具体的

な生活場面に目を向けると様々な関わりあいが見えてくる。

マップづくりの参加者からは「公園で子どもたちが遊ぶすぐ傍らに、ホームレスの方々が暮らしているのには驚いた。路上に暮らさざるを得ない方々の生活は厳しく、子どもたちにとっては脅威となっているかもしれない。双方にとってつらいこと。一部の公園はフェンスで閉鎖されるにいたっていた。仕方がないことなのかもしれないが、それで何になるのか、疑問を感じる。」  
「コミュニティーが崩れつつあることを感じた。変わっていくものに対して、人がついていけるのか。」という不安の声も聞こえる一方、「都市としての問題はたくさんあると感じるが、市民活動に大変活気があるように感じた。」という希望の声も聞こえてくる。

話が「まちの未来の姿・夢」というテーマに移ると、議論は自然に「繋がりづくり」「居場所づくり」という話に流れていった。新宿は確かに様々な「都市問題」が

表面化しつつある。しかしだからこそ様々なボランティア・NPO が活発に活動し、あたらしい「コミュニティー」としての繋がりを生み出しつつある。高齢者の居場所づくりから始まった NPO のデイサービスが、「元ホームレス」のお年寄りを受け入れるようになり、新興高層住宅で共同空間の有効利用を進めるグループが「外国籍住民との共生」をテーマとした地元団体の野外演劇を誘致し、マンションの老人会から始めた高齢者パソコン教室が、NPO として広く地域のお年寄りを受け入れ「いきいきサロン」として出会いの場となっている。

「最後は顔の見える関係作り」という言葉が、参加者からあがった。行きたい時に誰かがいて、話を出来る場所。そうした様々な「居場所」を暮らしのなかに紡いでいくことが、「地域づくり」の課題となる。スーパの会のとirikumiも、そうしたまちづくりとしての取り組みのなかで、「ホームレス」というラベルをはがしてゆくものでありたい。

**新宿 大久保界限  
共生・協働のまちづくり**

・「戸山公園子どもの遊び場を考える会」の「冒険遊び場」がある。子どもたちの声が響く公園の片隅に「ホームレス」と呼ばれる方々のテントが並ぶ。

・治安上の理由から夜間ロックアウトされる公園。柵に囲まれた公園を見ていると、「公共空間」のあり方についてあらためて考えさせられる。



大型化している駅に沿った通りには、タイ、中国、ミャンマー、韓国、チュニジアなど様々なレストランや事務所が並ぶ。



・職安通りはハングル表記の看板が溢れ、韓国のまちに在るような気がする。



・この辺りの外国籍住民居住率は30%を超えているといふ。多くは韓国出身者がしめる。  
単身世帯が多いという特徴もあり、特に独居高齢者と呼ばれる一人暮らし高齢者の方々が多い。元ホームレスの方々が老朽アパートに孤立して暮らす地域もある。